

# ゾウの背に揺られて

板東 浩

私は今、ゾウの背中に乗っている。場所はアフリカ南部にある国ジンバブエ（旧南ローデシア）。一歩ずつ進むたびに、ゆったりと身体が揺れる。そのリズムが心地よく、心まで癒されるようだ。これが音楽療法における「揺らぎ」につながるのかもしれない。

ジンバブエを訪れたのは、医学の国際学会に参加するためであった。現在、アフリカの医療の問題点は、熱帯感染症やエイズなどが主とされる。しかし、もっと重要なことは基本的な衣食住。生きていくためのきれいな水と食糧がない。乳幼児はしばしば下痢から脱水を起こし命を落とす。清潔と不潔という衛生の概念を教え、必要な蛋白質摂取のために川魚を釣る方法を伝授する。伝染病を伝播する蚊にさされないように衣服を工夫したり、バースコントロール

万→二・六万頭と、モザンビークでは五万四千八百→一千万頭となった。ジンバブエではゾウの保護により漸増してきているが、いまだに象牙の密漁のため憂慮すべき国もあるという。当ゾウ園は広大な敷地を持ち、ゾウを生後からずっと育てている。国からは援助がないので、観光収入だけですべてをまかなわねばならない。一人あたり数十ドルの外貨収入が同国では高い価値となり、ゾウや人々の生活に還元されている状況が理解できた。

ゾウの背中はとても高い。周りは見渡す限り草原で、はるか向こうには地平線が続く。空は抜けるように青く、速く流れる白い雲。夕方になるにつれて、西の空は次第にオレンジ色に。空気は澄みわたり、美しい夕焼け空だ。ゾウと私の影が長くなり、私たちについてくる。灌木に投影されるでこぼこの影が、踊っているようだ。影を見て楽しむなど、子供頃からの忘れていた感覚。この色彩、干し草を踏む音、自然の中で戯れた草や木の匂いなど、記憶の奥深く眠っていた五感の記憶が、久しぶりに甦ってきた気がする。

私と一緒に乗っているのは、ミッシェリという二

ルや赤ちゃんの育て方なども教育する。

このような生活指導や教育が、発展途上国における看護婦や医師の役割でもある。日本など先進国の医療では、生活の質（QOL）の重要性が叫ばれているが、事情がまったく異なる。本学会には、医学研究者や薬剤師、獣医、弁護士なども参加し、経済・社会などについても議論ができた。同国では、二十数年間で貨幣価値が五十〜百分の一に下降。「まず安定した経済があり、次に医療がある」という言葉に重みを感じた。

その学会の合間に、私はゾウ園ツアーに参加した次第である。最初にミニレクチャーが行われた。アフリカのゾウは、一九〇〇年頃には一千万頭いたが、一九七一年〜一九九五年には、二百万→五十四万頭と激減。ザンビア（旧北ローデシア）では十四歳のガイド。彼は家庭の経済的な事情で学校には行けず、ずっとゾウ園で生活し働いてきた。ゾウを調教し、英語と現地語で約二十種類のコマンド（命令）が可能とのこと。たとえば、口をあける、前足を挙げる、後ろ足だけで立つ、地面の上にあるものを鼻で取って観光客に渡す、など。二十歳から、観光客と一緒にゾウの背中に乗るようになった。仕事をしながら英語を覚え、今では私との意志疎通に不自由は感じさせない。単にゾウの説明だけでなく、いろいろな世間話にも対応できる。日本のことも知りたいという彼の熱意も伝わってきた。

ゾウと共に生きてきたミッシェリの笑顔と姿勢に接し、彼の大きな人間性が感じられた。同国を走ると、学会場周辺と道路沿いに住む人々との間には、あまりにも大きな差異がありすぎると思うのは私だけではあるまい。豊かな生活に慣れた日本人に、同国の状況を説明した場合、どれほどわかってもらえるだろうか？ 今回の出張により、人々の生活や医療、経済、社会など、いろいろな視点で考えさせていただく機会を得たと思う。